

大学におけるキャリア教育プログラムに 含めるべき社会人基礎力

小野史典・小杉考司・川崎徳子・大石英史

A study of the basic social skills which need to be included in career education programs
at university

ONO Fuminori, KOSUGI Koji, KAWASAKI Tokuko, OISHI Eiji

(Received September 29, 2017)

目 的

近年の日本では、大学においてキャリア教育を進めることが期待されており、大学は社会からのニーズに応じてキャリア教育プログラムを行うことが必要とされている。例えば、高校生が大学進学後に受ける高等教育へのギャップと適応、また自らの将来展望をもとにしたキャリア形成過程の中で感じる不適応感について、フォローアップの意味でサポートする必要性が指摘されている（溝上，2004）。また、大学改革については大学の内外から強く求められており、学生のニーズに対応した授業科目や教育プログラム開発が活発に行われている。加えて、大学生が抱く青年期特有の不安や精神的病理への対応機関も拡充が進んでいる。この過渡期の中で、実際の学生は社会から求められる社会人像を形成すべく、大学の教育カリキュラムの中で自己を柔軟に変化させていく必要がある。

本研究では、学生が社会から求められる社会人像として、社会人基礎力を取り上げる。社会人基礎力とは、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している概念である。企業や若者を取り巻く環境変化により、基礎学力、専門知識に加え、それらをうまく活用していくための社会人基礎力を意識的に育成していくことが重要だとされている。

しかしながら、こうしたキャリア教育の結果、学生が実際に幸福を感じているのかは不明である。これまで、幸福の指標として用いられてきたQOL（Quality of Life）研究の流れの中では、社会指標のような客観的指標（健康や教育の水準）だけでなく、個人の主観的判断、心理的側面を重視する必要が叫ばれ、主観的幸福

（SWB, Subjective Well-Being）が注目されるようになった（石井，1997）。こうした中、近年では、各個人がより充実した生活を目指すことの重要性と、そこに至る心理社会的要因の解明が、高齢者のみならずすべての世代で必要となってきた。

そこで本研究では、企業や地域社会が求める「社会人基礎力」について、現在の大学生がどのように理解し、在学中にどういったキャリア発達のレディネスを培っているのかを明らかにすることを第一の目的とする。また、こうしたキャリア教育の成果が学生の感じている「主観的幸福度」にどの程度影響を与えているのかを明らかにすることを第二の目的とする。

方 法

調査時期と調査対象者

2016年6月と2017年6月に、Y大学の学生を対象に質問紙による集合調査を実施し、398名の学生（1年生280名、2年生4名、3年生104名、4年生5名、不明5名。男女比は、男性164名、女性143名、無回答91名）から有効な調査の回答が得られた。

質問紙の構成

質問紙は、社会人基礎力と主観的幸福度の2つの尺度で構成した。社会人基礎力は、西道（2011）の社会人基礎力測定尺度45項目を用いた。例えば、「人から言われるのではなく、やらないといけないことを見つけて、自分から進んで取り組む力」といった項目に対し、「あなた自身はこれらの力をどの程度有していると思うか」という質問をし、4件法（4点：とてもある～1点：まったくない）で回答してもらった。

主観的幸福感とは、伊藤裕子・相良純子・池田政子・川浦康至（2003）の主観的幸福感尺度15項目を用いた。

例えば、「あなたは人生が面白いと思いますか」といった項目に、4件法（4点：非常にそう思う～1点：全くそう思わない）で回答してもらった。

結果

社会人基礎力尺度の因子分析

社会人基礎力測定尺度45項目について因子分析（Rのpsychパッケージにおけるfa関数、最小残差法、斜交ジオミン回転）を行った結果、以下の4因子構造が得られた。括弧内の数値は因子負荷量を示す。

第一因子；「未知の分野にまで思考を広げることで、新しい解決方法を再発見する力（0.70）」/「見過ごされがちな問題を発見する力（0.68）」/「課題を解決する複数のプロセスを明確にし、最善のプランを立案する力（0.66）」/「あらゆる可能性を再検討することで、解決方法を再発見する力（0.62）」/「自ら目標を設定し、粘り強く行動する力（0.62）」などの18項目が含まれたため、これらを「計画を立てたり創造する力」とした。

第二因子；「日々の体験を通して、社会の規範やマナーを理解する力（0.79）」/「集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力（0.78）」/「他者と共有する「空気」を読んで、自分の行動を修正できる力（0.74）」/「周りの人たちの仕事から、働く意義や大切さを理解する力（0.66）」/「状況に応じて、自らの発言や行動を適切に律する力（0.64）」などの11項目が含まれたため、これらを「社会的規律・規範に対する理解」とした。

第三因子；「人を巻き込んで提案する力（0.78）」/「立場や意見の異なる人に働きかけて、動かす力（0.76）」/「目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力（0.73）」/「自分の話に信頼感を持ってもらえるように話せる力（0.62）」/「話しやすい雰囲気を作って、相手の意見を引き出す力（0.58）」などの10項目が含まれたため、これらを「他者への働きかける協働の意図」とした。

第四因子；「自分に必要な情報や資料を的確に探し出す力（0.54）」/「自分に必要な情報を得るために、あらゆるメディアを活用する力（0.54）」/「得られた情報を、多面的・多角的に整理する力（0.52）」/「調べたことを伝える際に、効果的な手段やメディアを用いる力（0.49）」/「限られた時間の中で、情報や主張を、わかりやすく聞き手に伝える力（0.48）」などの6項目が含まれたため、これらを「情報収集」とした。

社会人基礎力の学年間の比較

前述の社会人基礎力4つの因子の得点に関して回帰

法で因子得点を推定した。一年生（277名）と三年生（102名）の学年平均を比較した。群間の平均値の比較には、豊田（2016）にならい正規分布を仮定できる二群に対するベイジアンモデリングを行い、各群の平均値と標準偏差を推定した。推定にはrstan2.16.2を用い、平均値の事前分布には一様分布を、標準偏差の事前分布には自由度4、平均0、標準偏差5の半t分布を仮定した。サンプリングは2,000回を4セット行い、前半1,000回をバーンイン期間として除外した。収束判定のRhatはいずれも1.0で事後分布からの有効なサンプリングであったと判断される。

分析の結果、第二因子（社会的規律・規範に対する理解）は一年生のスコアよりも三年生のスコアの方が高かったが（95%C.I.[0.10,0.65]）、第四因子（情報収集）は一年生のスコアよりも三年生のスコアの方が低かった（95%C.I.[-0.54,-0.11]）（Figure 1; Figure 2は事後分布を示している。網掛け部分は80%C.I.である）。

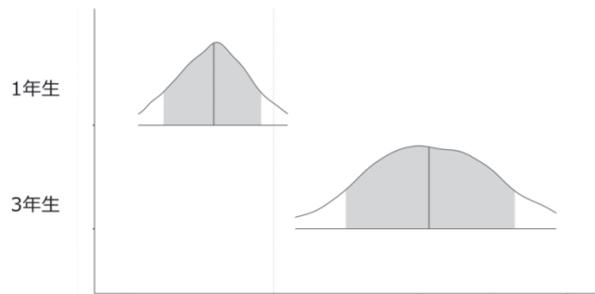


Figure 1. 第二因子（社会的規律・規範に対する理解）のスコアの学年間の比較

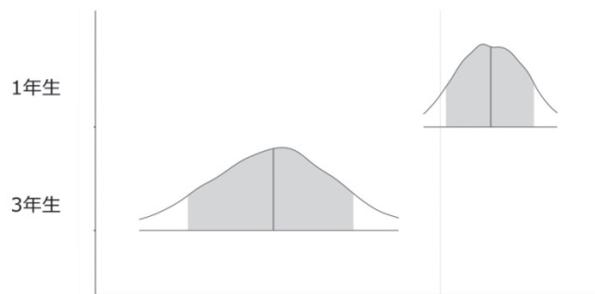


Figure 2. 第四因子（情報収集）のスコアの学年間の比較

社会人基礎力と主観的幸福感の相関

主観的幸福感尺度15項目を因子分析（同じくpsychパッケージのfa.poly関数を利用）したところ一因子構造であり、因子得点を幸福度得点とした。これを用いて、前述の社会人基礎力4つの因子の得点に関して、相関分析を行った結果、第一因子（計画を立てたり創造する力）、第二因子（社会的規律・規範に対する理解）、第三因子（他者への働きかける協働の意図）は正の相関が示されたが（それぞれ0.22, 0.11, 0.27）、第四因子（情報収集）は負の相関が示された（-0.14）（Figure 3）。

考 察

本研究では、社会人基礎力について、大学生がどのように理解し、在学中にどのようなキャリア発達のレジリエンスを培っているのかを明らかにすると共に、社会人基礎力が学生の感じている主観的幸福度にどの程度影響を与えているのかを明らかにすることを目的として、調査を行った。

社会人基礎力について因子分析を行った結果、先行研究（西道，2011）と同じ4因子構造が得られた。

これら4つの因子の得点に関して、学年間（一年生と三年生）の比較を行った結果、第二因子（社会的規律・規範に対する理解）は一年生のスコアよりも三年生のスコアの方が高かったが、第四因子（情報収集）は一年生のスコアよりも三年生のスコアの方が低かった。これらの結果の解釈には注意が必要だが、1つ目の結果は、2年間の大学生活で社会的規律・規範に対する理解が高まったと感じていることを示唆している。また、2つ目の結果は、学生が2年間の学生生活や授業等によって、社会の求める情報収集能力の高さを実感し、基準が高くなった結果、相対的にスコアが低くなったと解釈することもできる。ただし、今回の調査では、三年生の学生は教育学部の学生数が多かったことは留意すべきである。今後は学部の違いによる影響も踏まえた調査を行うことが必要だと考えられる。

主観的幸福感と社会人基礎力に関して、相関分析を行った結果、第一因子（計画を立てたり創造する力）と第二因子（社会的規律・規範に対する理解）、第三因子（他者への働きかける協働の意図）は正の相関が示され、

第四因子（情報収集）は負の相関が示された。この結果は、社会人基礎力を高めることが単純に主観的幸福感を高めることに繋がるわけではないことを示唆している。特に主観的幸福感と第四因子の情報収集の間に負の相関が示されたことは、情報過多の社会状況の中で、必要な情報を的確に探し出し、整理し、活用することに困難を感じる学生がいることを示唆している。そうだとすれば、今後のキャリア教育の中で、情報教育をどのような形で導入することが適切なかを検討していくことが課題のひとつであると考えられる。大学教育をキャリア教育の面から眺めると、社会人として求められる力を高めることが卒業後の自己実現の方向に繋がるということを、学生自身が実感できることが、新社会人としての意識のモチベーションを保つことに繋がっていくものと思われる。

今後のキャリア教育研究について

学生の自己評価としては、「他者への働きかける協働の意図」や「社会的規律・規範に対する理解」「計画を立てたり創造する力」「情報収集」の四次元が重視されていた。こうした構造と自己評価、大学への適応を考慮するとともに、上位学年に進むにつれ、こうした構造がどのように変化するかを検討することで、キャリア教育プログラムを策定することができると考えられる。

大学は、一般的な社会人基礎力を全学生に保障することと同時に、個別化する学生の特性に対応するべく、応用の幅が広い学生対応プログラムを提供することが求められる。

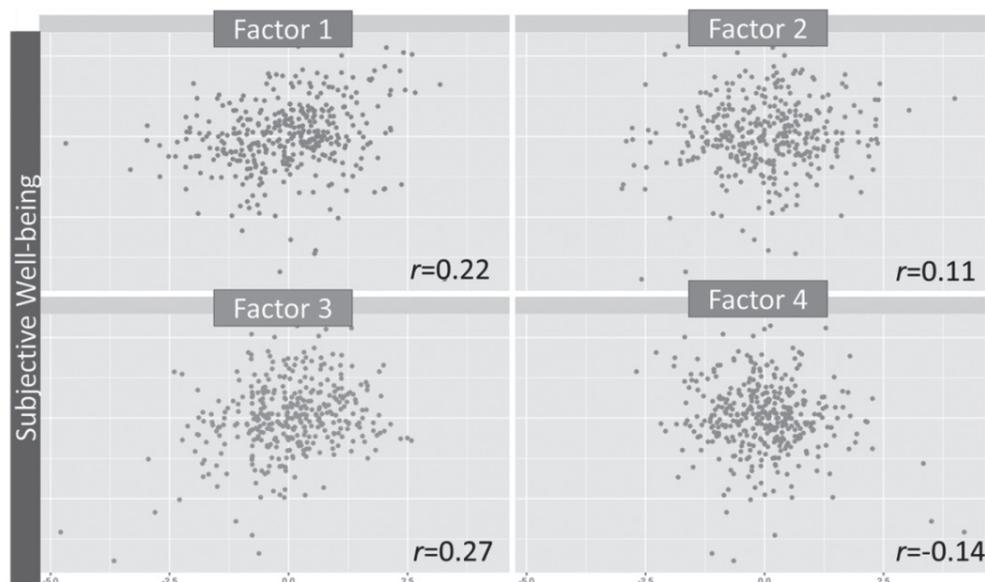


Figure 3. 主観的幸福感と社会人基礎力の相関

引用文献

- 石井留美（1997）主観的幸福感研究の動向コミュニティ心理学研究, 1, 94-107.
- 伊藤裕子・相良純子・池田政子・川浦康至（2003）主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 74 (3), 276-281.
- 溝上慎一（2004）現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる, NHK出版.
- 西道実（2011）社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み. プール学院大学研究紀要, 51, 217-228.
- 豊田秀樹（2016）はじめての統計データ分析, 朝倉書店.